Alacrity 通信

Alacrity 通信 第 4 号 2022.9.26 発行
編集　Alacrity Inc.　https://alacrity.jp
東京都大田区西蒲田 8-24-1　TEL　03-5408-9755

このたびは Alacrity 通信 第 4 号を発行いたしましたのでご案内いたします。本コンサートへご来場いただいたお客さま限定で、この物語の主人公ミハイルと綾、演奏された作品と作曲家について、そして編集部コラムでは大正から昭和初期までの日本に西洋文化が取り入れられてきた歴史について6 回にわたりご紹介いたします。

Original Concert シリーズ
クラシック音楽と日本の歴史

Vol. 1 - The Russians
Violin & Piano Duo ～ 歴史 " Story "
「ミハイル・グリゴーリエフの物語」

History

ミハイル・グリゴーリエフ
Mikhail Petrovich Grigoriev

あまり知られていない“音楽家”としての顔

内戦中のロシアで日本陸軍の通訳を務めた青年将校ミハイル・グリゴーリエフが、亡命後の日本で翻訳家・文学研究家としての道を切り拓き、その類いまれな才能を開花させたことについては、これまでの研究によって明らかです。例えば、義兄の詩人川路柳虹を通じて交流を深めた日本を代表する文豪・評論家の支援の下、数多くの日本文学のロシア語訳を発表したほか、早稲田大学のロシア人教授アレクサンドル・ワノフスキーとは『古事記』に関する共同翻訳と研究を行いました。また、ロシアの文豪トルストイの娘アレクサンドラ・トルスタヤが戦火を逃れて 1929 年に来日し、アメリカに亡命するまでの 2 年間を当地に滞在した折には、彼女とも親しく交流しています。さらに、日本ペンクラブの活動にも関わったほか、自身が会長として「白系露西亜人文芸会」を主宰し、翻訳を通じた日露の文学の普及活動にも尽力していました。ところが、こうした文学活動と並行して、同様の熱心さをもって行い、日本における西洋音楽の普及に小さからぬ爪痕を残していたグリゴーリエフの音楽活動については、これまであまり注目されてきませんでした。それは、当時のいわゆる“著名な”音楽家との交流に関する記録が残っていないからなのかもしれません。

チタの陸軍士官学校時代には「学業よりも情熱を注いだ」という音楽は、グリゴーリエフの来日当初には重要な生活の糧となり、未来の妻となる綾との出会いのきっかけにもなりました。チェロ奏者として日本全国を巡業したほか、綾が学んだ音楽教室ではマンドリンを教え、結婚後も映画館「新宿武蔵野館」にてオーケストラを指揮していました。武蔵野館では映画に合わせた曲が演奏されたほか、映画と映画の間の休憩奏楽では、グリゴーリエフがロシア人であったことからか、他の映画館には見られないチャイコフスキーの「スラブ行進曲」の演奏記録もあるといいます。日本政治思想家丸山眞男が述べるように、大正から昭和初期の日本において、映画館は一般の日本人が気軽に西洋音楽に触れ、親しむきっかけとなった場所でしたが、グリゴーリエフにとっては、心から愛した芸術活動の場であったと同時に、ロシア人としてのアイデンティティーを確認する場所でもありました。

ミハイル・グリゴーリエフ 満州(1938-1943)

やがて故郷ロシアの面影を求めたグリゴーリエフは満州に渡りましたが、そこでの音楽との関わり方は、プロの音楽家としての活動が目立った東京時代のそれとは少し異なっていたといえます。最初の赴任地ハルビンは、日本占領下でありながら華やかな先進的西欧文化都市でした。特に、ソビエトの圧政を逃れた白系ロシア人の音楽家や舞踏家が数多く集まっていたことでも知られており、モスクワオペラのバレリーナによるグループが設立され、亡命したボリショイメンバーによって始められたバレエ団は、ハルビン交響楽団と共に中国や日本でも公演を行っていました。そうした恵まれた環境で、グリゴーリエフは純粋に音楽を楽しみ、それは次に移った大連においても同様でした。この地では、東京の学校を卒業して家族に合流した長女キーラも、父グリゴーリエフと共に大連交響楽団に加わり、それぞれヴィオラと第一チェロを担当していましたが、オーケストラ活動だけでなく、時には自宅で父娘主催の室内楽のホームコンサートを開くなど、奏者として精力的に活動していました。

また、当時大連には映画『王様と私』などで知られる俳優ユル・ブリンナーの叔父夫婦が住んでおり、グリゴーリエフから日本語を習っていました。裕福なブリンナー一家は自宅の音楽室にグリゴーリエフ父娘らの室内楽団を招き、ホームパーティーを開催したり、時にはリハーサルのために解放、街の文化人たちの交流の場を提供したりしていました。1943年7月16日も、グリゴーリエフはいつものようにブリンナー家の一角にある音楽室を訪れ、翌日に予定されていた故ニコライ二世一家の追悼式典のためのリハーサルを行ないました。ブリンナー家の娘ヴェラは、この時のグリゴーリエフはいつにも増して疲労の色が濃かったと述べています。日本国籍を持っていながらロシア人との付き合いが過ぎると満鉄当局から注意を受けたのだと、ストレスを抱えているような言葉を漏らしていたともいいます。そしてこの日、ブリンナー家を辞した直後、グリゴーリエフは突如帰らぬ人となったのでした。

ハルビンの街並み

大連の街並み

参考文献

澤武石みどり「大正 ~ 昭和初年代の映画館の音楽と楽士：管弦楽 普及の過程」（『研究紀要』45、東京音楽大学、2022年2月）

澤田和彦「〈ロシアのラフカディオ・ハーン〉―ミハイル・グリゴーリエフの生涯と翻訳活動―」（望月恒子他共著『20世紀前半の在外ロシア文化研究』平成25~27年度科学研究費補助金研究成果報告書、2016年）

Alacrity

ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ
Dmitrii Dmitrievich Shostakovich

Music

4つのプレリュード
Four Preludes, Op. 34

1932～33年の間に作曲されたピアノ曲集「24の前奏曲」から10番、15番、16番、24番の4曲を選び、バイオリンとピアノのために編曲された作品です。

ドミートリイ・ドミートリエヴィチ・ショスタコーヴィチ
(1906年9月25日 - 1975年8月9日)

1906年9月25日、ロシア帝国サンクトペテルブルク生まれのショスタコーヴィチは、20世紀のロシアを代表する作曲家でありピアニストでもあります。交響曲、室内楽、オペラ、バレエ、協奏曲、声楽、映画音楽やジャズ風の作品など数々の傑作を生んだ偉大な作曲家です。

戦争と政治に奔放されながらも、近代的で斬新な作品を創造し続けた不屈の音楽家

1915年より母ソフィアからピアノの手ほどきを受け、すぐに音楽家としての才能を見せ始めたショスタコーヴィチは、翌年、グリャセール音楽学校へ入学。この頃のロシアは、第一次世界大戦の中でロシア革命が起こり、混乱の渦中にありました。幼いショスタコーヴィチは、多くの人々が無惨に亡くなる様子を目にしました。そのような状況の中でも夢を実現するために、1919年秋からサンクトペテルブルグ音楽院へ入学し、本格的に音楽家としての道を進み始めました。ところが、まだ15才だったショスタコーヴィチに最初の試練が訪れます。1922年父親が他界し彼と家族の生活は苦しくなっていくのです。そんな経済的に困窮していた彼に暖かく手を差し伸べてくれたのが当時音楽院長であったグラズノフでした。ショスタコーヴィチの才能を高く評価していたグラズノフは、さまざまな援助を彼に施してくれました。しかし翌1923年、音楽院ピアノ科を優秀な成績で修了した彼にさらなる苦しみが襲いかかります。結核を患いクリミアでの療養生活を余儀なくされてしまうのです。幸いにして病から順調に回復したショスタコーヴィチは、クリミアで初めてのピアノリサイタルを開催しました。その後、サンクトペテルブルグへ戻った彼は、家計を支えるために映画館でピアノ伴奏のアルバイトをしながら音楽院作曲科へと進み、さらなる研鑽を積んでいきました。

1924年、ソビエト連邦の最高指導者となったスターリンは、社会主義体制を確立するために音楽界にも厳しい制限と統制を行います。それは音楽家にとって最も厳しく困難な時代の始まりでしたが、そのような厳しい制限下においてもショスタコーヴィチは精力的に大作を作曲し発表していきました。1925年、作曲科の修了に伴い、自身初めてとなる「交響曲第1番』を作曲。翌年の初演で成功を収めました。1926年の秋、大学院へと進んだショスタコーヴィチは、翌年に第1回ショパン国際ピアノコンクールに出場し入賞します。さらに1928年にはメイエルホリド劇場の音楽部長を務め、1930～31年にはバレエ音楽を発表しています。そして翌1932年、彼はニーナ・ヴァルザルと結婚。婚約記念として歌劇「ムツェンスク郡のマクベス夫人」を作曲しニーナへ献呈しました。結婚の翌年1933年には、「ピアノ協奏曲第1番」が初演され、ここでも成功を収めました。
4つのプレリュードの原作である「前奏曲24番」はこの頃に作曲された作品。この作品は、1932年12月から翌年3月までに24曲が作曲されており、それは彼と妻ニーナの最も幸せだった新婚時代と重なります。また「前奏曲24番」は、ショパンの代表作である同名のピアノ曲集に影響され作曲した作品でもありました。ショパンコンクールで優勝できなかったショックからピアノの演奏活動を積極的に行っていなかったショスタコーヴィチは、これらのピアノ作品の発表以降、自作の演奏を中心とした演奏活動を再開しました。この

作品にはこのような背景があります。

この後 1936 年ごろからスターリンの独裁体制による大粛清などの影響から激動の時代が始まり、自由な創作は以前に増して厳しく困難な状況となっていきました。この時代のソ連には、ラフマニノフのように亡命を決意する人たちもいました。そんな時代でしたが、ショスタコーヴィチにとってうれしい出来事もありました。1936 年、長女リーナが誕生し、その年にレニングラード音楽院の講師となりました。のちに教授に就任しています。また、1938 年には長男マクシムも誕生。父親になった彼は、教育者として弟子を育て、平和活動にも積極的に参加していきました。その後 1943 年にはモスクワ音楽院教授に就任します。厳しい時代ではありましたが、音楽家の彼にとって順調でありまた家族も増え穏やかで充実した日々でもありました。しかしそれも長くは続きませんでした。

1948 年、42 歳となった彼に大きな試練が訪れます。それは、ジダーノフ批判でした。社会主義体制が求める路線に反した作品が共産党により批判された時であり、ショスタコーヴィチもその批判の対象となったのです。この影響により彼はレニングラードおよびモスクワ音楽院の教授の職を失いました。職を失った彼は、共産党を賛美するような映画音楽などを作曲しましたが、これは生きるためにやむを得ないことでした。社会主義体制の中で厳しい制限はありましたが、彼は何とか共存の道を歩みながら、自身の創作活動も続け、多くの傑作作品を発表し成功を収めていきました。やがて彼の作品は、アメリカや西ヨーロッパで評価され、世界的な作曲家としての地位を確立していくことになります。

1953 年、スターリンが死去し新たな時代が訪れました。ショスタコーヴィチは、この年、「交響曲第 10 番」を発表。これまで批判を避けるため未発表だった「ヴァイオリン協奏曲第 1 番」や「弦楽四重奏曲第 4 番」などを次々に発表します。幾度も試練を経験した彼は、自身の音楽哲学に基づき創作活動を続けましたが、そんな彼に突然、悲劇がまた訪れます。1954 年、妻ニーナが亡くなり、翌年には母ソフィが亡くなるのです。そして家族を失い悲しみに打ちのめされていた彼に 1958 年、ピアニスト・作曲家にとって致命的な右手の麻痺というさらなる苦しみが襲いかかります。さらにその 2 年後、息子の結婚式で転倒したショスタコーヴィチは、右足を骨折し入院。のちに骨髄性小児麻痺だったことが分かっています。
晩年のショスタコーヴィチは、たびたび心筋梗塞を起こし入退院を繰り返していました。1970 年からはサナトリウムで療養生活を送っていましたが、翌年心筋梗塞で再入院。そして 1975 年 8 月 9 日、ついに肺がんのためモスクワの病院で亡くなるのです。彼は亡くなる前月に最後の作品「ヴィオラ・ソナタ」を完成していました。享年 68 歳でした。
ショスタコーヴィチは、戦争と政治にその人生を翻弄されながらも、自身の音楽哲学と信念を貫き、死の直前まで新たな時代の音楽を創造し続けた、20 世紀を代表するまさに不屈の音楽家でした。

Alacrity 編集部
編集部コラムは次のページへ

Alacrity

編集部 大正モダンコラム

新時代の若者たち

大正時代がそれまでの時代と画期的に違うのは、女性の社会進出という側面です。第 1 次世界大戦をきっかけに、戦場に出る看護師の断髪とパーマネントが活動的女性の象徴となりハリウッド映画やグラフ誌によって広まったことで、欧米では「フラッパー」、フランスでは「ギャルソンヌ」、そして日本では「モダンガール」と呼ばれる“新しい女性”が登場します。新たな思想や運動が世界で時を同じくして起こっていたのでした。

大正時代の後半になると、ウエイトレスやバスガール、電話交換手、タイピストなどの職業婦人が登場し、都市部では洋装の女性が増え、洋髪が流行し、化粧法も西洋風に変わっていきました。

日本で初めてファッションショーが行われたのは昭和 2 年のこと。世界でも珍しい百貨店の中にオープンした劇場、「三越ホール」のこけら落としイベントの一つでした。モデルになったのは水谷八重子さんをはじめとする 3 人の女優さん。といっても、一般庶民はまだ着物の時代。三越呉服店が募集した新作の着物を着て日本舞踊を踊ったということで、現代の私たちが想像するファッションショーとは随分様子が違うようですが。

一方で、これまでに見たことのないようなファッションで登場したのがモボ・モガと呼ばれる若者たちでした。ひざ下の長めの丈のスカートや、“アッパッパ”と呼ばれたワンピースに釣り鐘型の帽子にボブカット、化粧はハリウッド女優をお手本に引き眉と赤い口紅。アッパッパはゆったりとした夏用の服装のことで、歩くと裾が広がる様子から名付けられました。そんないでたちで颯爽と銀座の街を闊歩する自立した新しい女性は「モダンガール」と呼ばれ、その姿を切り取った写真はまるで外国映画のワンシーンようで、えっ、これが日本人？と思うほどです。

「モダンボーイ」のほうは、髪型はオールバック、色物のワイシャツにネクタイ、ゆったりとしたセーラーパンツやラッパズボンにロイド眼鏡、山高帽をかぶりステッキを持ってといった感じの新しがりやの青年。

西洋化が進んだとはいえ、実はまだ男性の 4 割、女性の 9 割が和装という時代にあって、モボ・モガたちはひときわ目立つ存在でした。憧れと抵抗という 2 つの感情に迎えられながらも、グローバルの波のほとばしる滴をすくい上げ、おしゃれを自由に楽しむ若者たち。暮らしの風景は大きく変わったのでした。

モガといえば、作家で真っ先に断髪にしたのは、多くの恋愛・結婚遍歴と波乱に富んだ生涯を送ったことで有名な宇野千代だったとか。旺盛な執筆活動だけでなく、日本初のファッション雑誌を創刊したり、着物デザイナーや実業家の顔も持っていたりという多才ぶり。明治30年に生まれ、大正、昭和、そして平成にかけて、98 年の人生を熱く前向きに全力で生きた女性です。

1920 年代のモボ・モガ　出典 : Flickr

配信期間：URL より各号配信日から 30 日間閲覧可能（非公開）
2021 年 公演ご来場者さま（6 ～ 11 月まで / 月 1 回）
2022 年 公演ご来場者さま（8 ～ 1 月まで / 月 1 回）

第 5 号のご案内は、10/28 ～ 31 の配信となります。

【お問合せ先】
お問合わせフォーム : https://alacrity.jp/contact/
E-mail: music@alacrity.jp